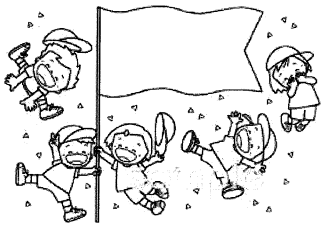

みんな、頑張ってんねん

園長　野中　泉

９月も半ばが過ぎのアトムフェスティバル（4・5 歳児参加）の予行。子どもたちと一緒につくっている取り組みも、少しずつ形が見えてきたある日のことです。みかん組の畳登りに「畳登り名人」として参戦して熱血指導をしていたすいか組担任の志賀ちゃん（志賀保育士）が、「頑張れ～」と声を揃えて友だちを応援していたギャラリーの子どもたちに言ったひとこと。「もう、みんな頑張ってんねん！頑張れ～じゃなくて、手を上に挙げろ～とか、足でけって！って教えちゃって！」。その言葉を聞いたみかん組の子どもたち、口々に「手をぐ～んとあげて」「足で、思いっきりけるんやで～」と志賀ちゃんに負けず劣らず大声で熱血指導です。

私もその場にいたのですが、「もう、みんな頑張ってんねん」の言葉に、ああ、本当にそうだなと胸が熱くなりました。自分の背丈の倍以上高い畳をにらみつけ、歯を食いしばって走ってくる子どもたち。走り方がへたくそで、助走でうまく勢いがつかない子も、手足の使い方が不器用でうまく畳を駆け上れない子も。恥ずかしがり屋で、注目されて走るだけでも緊張で顔がこわばっている子も。みんな、頑張っている。昨日のぼくより、今日の私より、子どもたち自身が頑張りたいと願っていることが、畳を持つ私の腕にも肩にもドシンと響いてきます。

アトムの運動会「アトム・フェスティバル」は、他の保育園の運動会とは少し違います。多くの保育園では、運動会の種目は大人が決めますが、アトムフェスでは、何をするか子どもと話し合って決めていきます。また、普通の運動会では、何回も練習を重ねてその成果（結果）を披露することが目的ですが、アトムフェスでは、まわりの友だちの姿を見て自分自身の心と向き合って、迷い、悩んで、自分で納得して決める、子どもたちが自分たちの運動会（アトムフェス）をつくっていくそのプロセスの方を、より大事にしています。その上で、時にはたとえ当日に「今日は、やめる」と観客の前で披露しないことを子ども自身が決めたとしても、その決断が子どもの納得であることを尊重します。

この話をすると、時々「子どもたちがしたいことをする、嫌なことはさせないだけでは、成長につながらないのでは？」と言われますが、それは、大きな間違いです。なぜなら、自分がどうしたいのかと、自分の揺れる気持ちに向き合い、自分で自分の行動を決めることは、実は大人に〇〇しなさいと言われてやることの何倍も大変なことだからです。

子どもたち、とくに 5 歳児は、私たち大人が思うより、ずっと自分自身のことや友だちのことを知っています。自分の苦手とすること、これくらいならできるかなということがちゃんとわかっている。あいつには勝てる、あの子にはかなわないというような複雑な葛藤も含めて、自分の力を見つめています。そして、その上で、友だちの姿や、先輩（前のみかん組さん）の姿を見て、おれもやってみたいと挑戦する「力」もあるのです。しかも、それは大人が強制しなくても、子どもたち自身の中に、もともと備わった「力」であることを、私はアトムに来て「みかん組になったら、畳登りするんや」と毎年当然のように胸をはって受け継いでいく 5 歳児の姿に教えてもらっていると感じています。

予行を終えて、畳の片付けをしていたら、この日は畳の上まで登れなったまひろが、一緒に部屋に帰る友だちに「次は、もっと頑張る」と呟いたのが背中越しに聞こえました。まひろの「頑張る」が大人に聞かせる「頑張る」じゃなく、自分から自分へのエール（応援）だったことに、うれしくなります。

私たちの人生は、うまくいくことばかりではありません。むしろ、思い通りにいかないことや、くじけそうになることの方がずっと多いのかもしれません。でも、5 歳のこの子たちが、できへんけど「やってみよう」と葛藤しながらむきあっているこの時間が、悔しかったり、もどかしかったりを必死で受け止めているその小さな揺れる心が、いつか、その日の彼ら自身を支える「力」になることを願いながら、今年もアトムフェスティバル（運動会）を迎えます。